中央公論美術出版

ルクス・アルティウム

越宏一先生退任記念論文集

越宏一先生退任記念論文集刊行会
代表　越川　倫明、　薩摩　雅登
　　佐藤　直樹、　田辺幹之助

定価 29,400円（本体28,000円＋税） 2010年4月刊
B5判上製函入 本文400頁 挿図279点 ISBN978-4-8055-0623-3

LVX ARTIVM

今年 67 歳を迎えられた越宏一先生は、2010 年の 3 月をもって、1979 年より 31 年間の長きにわたって教鞭を執ってこられた東京藝術大学を退任なさいます。本論文集はこの新たな出発を記念して、先生のご指導を受け、あるいはご学風に接した 34 人の執筆者によって献呈されるものです。

東京藝術大学美術学部芸術学科を 1965 年に卒業された先生は、ウィーン大学で 1971 年、古代末期の創世記挿絵サイクルの伝統に関する論文「ウィーンの《世界史》写本 Die Wiener “Histoire Universelle” (Cod. 2576) unter Berucksichtigung der sogenannten Cottongenesis-Rezension?」により博士号を取得なさいました。そこで先生は、オットー・ペヒト教授やオットー・デームス教授といった優れた美術史家の薫陶を受け、古代末期からビザンチンを含む広範な西洋中世美術史を学ぶのみならず、フランツ・ヴィックホフ、アーロイス・リーグル、マックス・ドヴォルシャークなどを輩出しているウィーン学派の学風を吸収されました。1972 年に帰国された後、1973 年に国立西洋美術館の研究員となられた先生は、数多くの重要な展覧会を手がけるばかりではなく、同館所蔵作品の調査などに多大な功績を残すと同時に、精緻な美術史論文の発表も続けられ、美術館がひとつの美術史研究センターとして機能するよう尽力されました。先生が美術館学芸員として親しく接した作品によって美的な質に対する鋭敏な目を養われたことは、大学でのご指導の端々にもうかがうことができます。

その後、先生は 1979 年に母校、東京藝術大学に助教授として移られることとなりましたが、芸大だけではなく、非常勤講師として、東北大学、東京大学、早稲田大学、跡見学園女子大学などの数多くの大学で後進を育てられました。講義の内容は、古代末期・初期キリスト教時代から北方ルネサンスに至るまでの絵画、彫刻、工芸に留まらず、実作品に対する豊富な知見に裏付けられた、生き生きとした美術史の方法論にまで及んでいます。そこで先生が示されたのは、図像学的・様式論的な知識と観察に基づいて、作品の造形的原理に肉薄する研究の姿勢でした。先生の謦咳に接したとき何よりも魅力として映るのは、作品の美的内容の理解に焦点を絞った、このような作品分析ではないでしょうか。（中略）

さて、本論文集は古代末期から現代まで、きわめて多岐に亘る分野に跨っています。これらの論文は、先生の美術史に対する学識の深さと関心の広がりをそのまま反映するものと言ってよいでしょう。表題の「ルクス・アルティウム」は、美術史という学問を通じて芸術作品の深みからその光芒を掬い上げる、先生のご業績を讃えるものとして記念論文集刊行会によって選ばせていただきました。装丁は、画家の上葛明広氏によるものです。本論文集が先生の学恩へのささやかな感謝のしるしとなるのであれば、執筆者一同、これにまさる悦びはありません。（「はじめに」より）

目　次

はじめに

古代の残照

ローマ、サンタ・マリア・アンティクァ聖堂の再考　加藤 磨珠枝

《サン・パオロ・フォーリ・レ・ムーラの聖書》の挿絵研究 ―その造形上の特質について―　保坂 ひろみ

《ブリュッセルのフィシオログス》―挿絵成立に関する一考察―　長友 瑞絵

《バンベルク黙示録》写本挿絵サイクル ―挿絵、テキスト、その配列関係を巡って―　濱西 雅子

色彩から見る《バイユーのタピストリー》　小野寺 玲子

シトー会の『ヨブ記講解』―イニシアル挿絵における月暦図の影響―　近藤 真彫

《ウィンチェスター聖書》の『創世記』図像 ―12世紀ロマネスクの大型聖書本に見られる「エヴァの創造」―　武井 美砂

ダヴィト・ガレジ（グルジア）、ベルトゥバニ修道院主聖堂の壁画についての覚書　高 晟埈

中世の黄昏

レーゲンスブルクの美術　序　永井 繁樹

後期中世のキリスト公生涯の図像サイクルとミサの福音書朗読 ―聖書絵本を中心として―　前川 久美子

《ロアンの大時禱書》「審判者の前の死者」―中世末期の時禱書における最後の審判と私審判　高木 真喜子

ルネ・ダンジューの『馬上槍試合の書』　田中 久美子

「一角獣を伴った貴婦人」タピスリーが織りなす世俗の愛と五感の二重奏　長能 美香

―中世末期とルネサンスの文学背景と造形による主題解釈―

《ケーファーマルクト祭壇》―後期ゴシック木彫祭壇の彫刻様式と色彩性について―　田辺 幹之助

《マリア・マグダレーナ祭壇》再考　薩摩 雅登

デューラーとヤン・ファン・エイク　下村 耕史

アルブレヒト・デューラーの線描の芸術 ―木版画連作《黙示録》（1498年）について―　青山 愛香

活動する眼、視線のディレンマ―オットー・ペヒトのドイツ絵画論について　新藤 淳

初期版画における多色化の問題 ―制作と受容の側面から―　保井 亜弓

南へのまなざし

《ルチェッライのマドンナ》に関する一考察 ―ドゥッチョの空間表現の形成をめぐって―　吉澤 早苗

中世絵画の描き直し ―ナポリ、サンタ・キアーラ修道院壁画装飾について―　谷古宇 尚

アントニオ・フェデリーギとシエナのルネサンス　上村 清雄

ギルランダイオの初期作ブロッツィの《聖会話》におけるフランドル絵画の影響　江藤 匠

―ペトルス・クリストゥス作プラドの《聖母子》との関係について―

ドメニコ・ティントレットの油彩素描 ―編年上の指標に関する基礎考察―　越川 倫明

ウィーン美術史美術館所蔵カルロ・サラチェーニ《ホロフェルネスの首を持つユーディット》について　佐藤 直樹

「古代性と偉大」の追求 ―フランシスコ・パチェーコとイタリアの美術理論―　川瀬 佑介

モダンへの照射

ウィリアム・ホガースの英国性 ―その造形的特質からの一考察―　大庭 朋子

ドーミエの「双子」―《劇場にて》（ノイエ・ピナコテーク蔵）の制作年代の問題　大森 弦史

内田正雄がもたらした東京美術学校の「和蘭人の水彩画」―19世紀オランダ風景水彩画と日本近代との接点　熊澤 弘

巡る航路 ―フリードリヒ作《人生の諸段階》の解釈をめぐって―　杉山 あかね

近代ミュンヘン画壇の一側面 ―Julius Exterをめぐって―　河合 哲夫

フィンセント・ファン・ゴッホにおける〈一対のもの〉　本江 邦夫

もう一つの「アルベルティーナ」―第1回国際美術史学会と複製写真―　川口 雅子

美的価値判断について ―クレメント・グリンバーグを中心に―　山村 仁志

お取り扱いは

中央公論美術出版

〒104-0031 東京都中央区京橋 2-8-7

電話 03-3561-5993　ＦＡＸ　03-3561-5834